

植松電機新聞

2025年9月1日
田中学園立命館
慶祥小学校
6年鈴木楓人

植松電機のモットー

今回私たちが研修へ行ったのは植松電機という会社だ。その会社の社長、植松努さんのお話を聞きに行った。植松さんの会社では新しい社員を選ぶときに大切にしているのは「学歴は関係ない」だそうだ。なぜなら、「植松電機はだれもやることがないことをやる会社。つまり、誰も教えてくれないから全員初心者な人で学歴関係ありません。」

とおっしゃった。しかし、植松さんが本当に大切にしていたのは「知りたい！やってみてほしい！」という気持ちだったことが分かった。やったことないことは「知りたい！やってみてほしい！」で変わるんだと。そして今では社員の中に海外から来た人もいます。そして、大人が子供たちの夢を壊しています。「ロケットを作るには頭がよくないと

無理」「お前は女の子だぞ」などといった言葉が植松さんは嫌いなんだそうだ。このことから、学歴も関係なく性別国籍関係なく社員を取り入れている。それが植松電機の魅力的なことであり植松電機のモットーなのではないのかと感じることができた。

僕たちのプログラムにあったのがモデルロケット製作体験そして、ロケット打ち上げ体験だ。植松さんは「海外企業は作る時、すぐ

にみんなで話し合い協力しながら作業を進めていたのみなさんには説明を一切しないので友達と協力して作ってください」と言われ

た。植松さんにはある人に助けられたといった。それは永田教授だった。この出会いは

運命の出会い

植松さんが何度もこのスピーチで口にしていてこのスピーチのキーワードとなっていた「思うは招く」この言葉にはいったいどのような意味があるのだろうか。この「思うは招く」は植松さんが子供の時、お母さんから教えてもらった言葉なんだそうだ。この言葉には、思ったらそうなる、思い続けたらそうなるという意味なんだそうだ。この言葉は今でも大切にしているらしくて、「思うは招く」は夢をかなえるための大切な原動力となる言葉だなと感じた。

いよいよロケット制作



↑ロケット打ち上げ体験の様子

失敗はデータ、悪くなんかない

植松さんのお話の一つにあったのがこの会社の話。この植松電機という会社は主にロケットを開発する会社で時々打ち上げているそうだ。植松さんはこの会社を立ち上げたとき、ロケットに必要なエンジンを作っていたそうだ。けれど、そのエンジンは爆発してもう一回やるも爆発しこれを何回も何回も続けていたそうだ。そして植松さんたちはあきらめずに続けた結果、とても大きなエンジンを作るのに成功。そこで植松さ



↑植松さんによるスピーチの様子

んは「失敗はいいんだよ。失敗はデータだから。だめじゃない。」とやさしい口調で話した。そして植松さんは「経験をたくさん積むことで、できるようになるんだよ」とも話した。今では植松電機という会社に全国各地からそして海外の企業も植松電機のロケットなどを見に来ているようだ。これには僕も未来って何が起こるかわからないのだな。あきらめないで頑張っていこう。と思うこともできた。植松さんは幼少期のころ忘れ物が多くて集団行動ができな



ロケット開発の様子(左)植松さん(右)永田教授

魔法の言葉 思うは招く



↑植松さんがスピーチをしているときの様子

植松さんの本当の夢

植松さんのスピーチの中で会った話題の一つが自殺についてのお話。植松さんは「実は日本の若者の自殺率は世界で一位なんだよ」と話し、みんな驚きの表情だ

った。そこで植松さんは「植松電機」という会社を立ち上げたそうだ。けれどなぜロケット、宇宙にかかわる会社なのか。一見、自殺とは全く関係なさそう

が。植松さんは夢と手段は違うよという話をされた。まず、手段とはいわゆる夢(例…医者、警察官など)そして夢が医者だと人を救うなどが夢だ！と言っていました。植松さんは「ロケットを作るという手段で仲間を増やして学歴関係なくしていい仕事をなくす！」と

いうのが植松さんの本当の夢ということが分かった。今、世界での自殺率は日本が一位だ。そんな中、手段は違ったとしても植松電機のような「いい仕事をなくしたい」という熱い思いを持つている会社が必要とされるのではないかと考えることができた。

編集後記

今回、理科校外学習にて植松電機へ行きました。このプログラムの一つにあるスピーチを通して永田教授の話が一番印象に残りました。なぜなら、ぼくはプロ野球選手を目指していて周

いと」と言われて「やっぱ無理だな」と感じていました。しかし、永田教授との運命の出会いの話を聞いて、ぼくも思い続けられいつか運命の出会いが来て助け合えることができる、と思うことができました。「思うは招く」この言葉を毎日忘れぬよう、思い続けていつかプロ野球選手になるという夢をかなえたいなと思えました。

神様のおかげと言っていました。植松さんはお金もなくロケットを作るのをあきらめようとしていたが、そこで出会ったそう。永田教授は安全なロケットづくりの研究をしていたそう。お互いに足りないものがあったから助け合ったそう。そして今では、宇宙開発ができるまで成長することができたそう。一人はお互い足りないところがあるからこそ、助け合いができる。足りていたら、助け合いなんかできないじゃないか。「この言葉はまた「思うは招く」に続いて、また誰かを救ったり助けたりしてくれるような魔法の言葉になるのではないかと感じる